

平成30年度秋田県総合政策審議会第1回ふるさと定着回帰部会（議事要旨）

1 日時 平成30年5月31日（木）15:30～17:10

2 場所 県総合庁舎607会議室

3 出席者（敬称略）

【ふるさと定着回帰部会委員】

須田 紘彬（株式会社あきた総研代表取締役）

藤原はるみ（幼保連携型認定こども園勝平幼稚園・ひよこ保育園園長）

藤原 弘章（NPO法人ふじさと元気塾理事長）

山崎 純（NPO法人子育て応援Seed理事長）

【県】

猿橋 進（あきた未来創造部次長）

久米 寿（あきた未来創造部あきた未来戦略課長）

村田 詠吾（あきた未来創造部移住・定住促進課長）

三浦 卓美（あきた未来創造部移住・定住促進課移住定住推進監）

坂本 雅和（あきた未来創造部地域の元気創造課長）

田原 剛美（あきた未来創造部活力ある集落づくり支援室長）

小西 弘紀（企画振興部市町村課長）

武藤 秀男（建設部技術管理課長）

竹村 勉（建設部都市計画課長）

田口 秀男（建設部参事兼下水道課長）

伊藤 和博（建設部建築住宅課長）

鈴木 和朗（教育庁幼保推進課長）

4 あいさつ（猿橋あきた未来創造部次長）

- ・ 本日は、お忙しいところ、総合政策審議会に引き続きふるさと定着回帰部会にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、部会委員の皆様には、日頃から県政の推進に格別のご協力を賜り、改めてお礼申し上げます。
- ・ 当部会で扱う人口減少対策については本県の最重要課題とされているが、本県の人口は、昨年4月に人口が100万人を割りこみ、この3月に国立社会保障・人口問題研究所が公表した地域別の将来推計人口では、本県の人口は27年後の2045年には約4割減少して約60万人となると推計されるなど、ショッキングな結果となっており、マスコ

ミで大きく報道されているところである。

- 県としても、昨年度からあきた未来創造部を立ち上げ、人口減少対策の取組を加速しているところであり、2期プランでは戦略6に位置づけられていた地域力創造戦略を衣替えし、「秋田の未来につながるふるさと定着回帰戦略」として戦略1に位置づけ、全庁を挙げて取り組むこととしている。
- この戦略1は、人口減少に歯止めをかけるための施策と、人口が減少しても安心して生活できる地域づくりのための施策の、大きな二つの視点で整理されており、極めて重要な役割を持つものと考えている。
- 具体的には、若者の県内回帰・定着や移住、少子化対策をはじめ、高齢化が進む地域等であっても、皆で地域を支え合うことができる社会づくりやまちづくりなど、これからの秋田に欠かせない取組を進めることとしている。
- 特に、小規模市町村などでは、行政サービスの維持が困難となることも予想されるため、県と市町村との機能合体、事務の共同化など、県民が将来に不安を抱くことなく、未来に向かって明るい希望を抱くことができるように、施策を展開していくことができる仕組みを構築していく必要があると考えている。
- こうした中で、委員の皆様には、プランの着実な推進と実現のため、こうした取組のより効果的な進め方や、来年度の事業のあり方などについて、それぞれのご活動に基づいた、いわゆる現場目線からのご意見やご助言をいただきたいと考えている。
- 限られた期間内ではあるが、それぞれのご経験と知見に基づいた忌憚のないご発言をしていただくことをぜひお願い申し上げます、あいさつとする。

5 委員の紹介

6 事務局紹介

7 部会長選出

藤原弘章委員を選出

8 部会長代理指名

山崎純委員を指名

9 部会長あいさつ

- ・ 委員の皆様と事務局の意見をよく聞いて、提言をまとめていきたいと思う。よろしくお願ひする。

10 議事

(1) 専門部会の進め方について

事務局

部会のスケジュール等について、総合政策審議会資料3及び部会資料-1により説明

●藤原部会長

- ・ 進め方の関係で、質問、意見はあるか。

(なし)

(2) H30年度第3期ふるさと秋田元気創造プランの戦略1の主な取組について

村田移住・定住促進課長

猿橋あきた未来創造部次長

田原活力ある集落づくり支援室長

坂本地域の元気創造課長

主要な事業について、部会資料-2、3により説明

●藤原部会長

- ・ まず、各委員から自己紹介とそれぞれが取り組まれていることについて、お話ししてもらいたい。

●山崎委員

- ・ NPO法人子育て応援 Seed を設立して10年目、その前から子育て支援については15年ほど活動を続けている。主に0～3歳の就園前の乳幼児と保護者を対象として秋田市の在宅子育ての支援を行っており、現在、主な活動としては秋田駅前のフォンテあきたにある秋田こども広場という秋田市設置の施設を運営している。休みが元旦しかなく、午前10時から午後7時まで、親子が無料で遊んだり交流したりしており、1時間600円で預かりも行っている。
- ・ ここはスタッフ全員女性であるが、チームワークよく様々な工夫をし、話し合いながら、仕事をしているが、これが女性が働きやすい職場づくりの原点だろうと考えている。
- ・ ほかにこれも秋田市のクーポン券事業として、大型バスで在宅子育ての親子を遠足につ

れていくという事業も実施している。

●藤原（は）委員

- ・ 認定こども園の園長をしているが、秋田県は私立幼稚園や市町村立幼稚園が認定こども園となる例が多く、数も現在57と比較的多い。
- ・ 秋田県では幼稚園の教員の研修受講歴のデータベース化が進んでいるということで、他県でも驚かされている。
- ・ 当園は若い教員・保育士が多く、産休や育休に入る職員も多いとともに入れ替わりも激しく、職員確保には苦勞している。支援研修員制度ができて、資格のない方でも制度を活用してみなし保育士になっていただけるのはありがたい。
- ・ 英語教育が進められているが、その前に日本語を大事にしてほしいと考えている。

●須田委員

- ・ 当社では大学生の就職支援や小中高校生向けのキャリア教育、就職ガイダンスなどの求職者向けのサービスを委託事業で行っている。もう一つの大きな柱は、中小企業向けの人材確保・定着の支援で、東北経済産業局の委託事業で企業セミナー、魅力発信等を首都圏の経験者をターゲットに行っており、この戦略に合致する取組をしている。
- ・ 人材定着については、採用してもすぐにやめてしまうのが悩みであるが、それを止める手段はやはり社内で相談できるような人間関係の構築だと思われる。
- ・ 会社ではなく個人としてボランティアや支援活動を行っていることとしては、働く目的について考える「ハタモク」というワークショップを開催している。コンセプトは年上の友達をつくる、ということで高校生・大学生を対象としていたが、もっと早くこのようなイベントに参加したかったという声があったので、「こどものまちしごとーい」というイベントを小学生を対象に開催している。企業やNPOが子どもたちに何を学んでもらうかということを考えながら、お互いの情報交換や地域づくりを考え、人材交流をしていくということを、会社の利益事業としてではなく、地域活動として取り組んできた。

●藤原部会長

- ・ NPO法人ふじさと元気塾として8年間活動してきた。県の仕事や町の仕事を頼まれることも増えてきて、なんとかやってきている。
- ・ 藤里町は県内でも小規模で高齢化が進んでいるところであり、将来小規模な市町村は運営が困難になるな、と実感している。人口減少はますます加速するんじゃないかと不安になってきているところである。お年寄りも冬場は外を歩いて買い物をするにも大変であり、地元のためになんとか頑張っていきたいと思っている。
- ・ 最近民泊事業に携わっており、藤里町では一気に6件立ち上がった。学生グループと

協働している中で、最近は口コミでお客さんからの問い合わせも増えてきた。農水省の補助事業だが、将来は自立しなければならないので工夫してやっていきたい。

●藤原部会長

- ・ 残り時間も少ないので、提言に結びつけるために、移住と若者の回帰定着、少子化対策、地域づくりの三点について、各委員からそれぞれ意見を伺いたい。

●須田委員

- ・ 移住に関して言えば、最近情報は多くてみんな疲れているような印象が強い。学生や若い人たちにイベントの案内をするときには、こちらの都合で説明をすると引いてしまおうし、見せ方の部分で工夫の必要がある。われわれの常識からは少し外れたような、もっとくだけた、面白い告知の仕方を工夫していかなければならないのではないかな。
- ・ 首都圏にいる学生や社会人は秋田には仕事がない、という言い方をすることが多い。どう対処していくか皆さん考えていることだと思うが、どういう仕事がないかというところ、第3次産業、いわゆる営業企画職やクリエイティブな仕事がないと言っている。そういった職も実はあるんだよ、ということを書いていかなければならない。営業職といっても単にものを売るというものだけでなく、営業企画ということでコンサルタントのようなサービス業という認識が首都圏ではある。
- ・ 県外の人にはハローワークではなく、インターネットで情報にアクセスするので、情報提供の面も考えていかなければならない。
- ・ 仕事があるよ、と伝えるとして、県内でも秋田市にしかなければイメージは変わらないし、「思ったよりある」ではなく「他県よりある」という伝え方をしていかなければならない。
- ・ 秋田の仕事としても、今はない仕事、起業や新規事業で、秋田には課題があるからそのための仕事もあるという観点が必要ではないか。東京では自分の役割として仕事している人が、秋田に来れば自分の思うことで課題解決のプロジェクトに携わり、解決できるという募集の仕方をして、収入差に負けない自由度と仕事の「余白」を感じてもらおうというのはいかがでしょうか。

●藤原（は）委員

- ・ 須田委員の話聞いて、世の中変わってきているな、とひしひしと感じているが、子育て、人づくりというものは不変の部分があると考えている。
- ・ どうしても、子どもに早く早くと言ってしまふことが多いと思うが、幼稚園や保育園では急かさずに過ごしてもらいたいと思っている。山間部や田舎で様々な体験を幼児期にしておくことが、将来大人になったときに役立ってくると思う。

●山崎委員

- ・ 子どもを1人育てている母親が2人目を育てることに不安を覚えているときに、私たちは行政の支援を紹介するのだが、どんな支援があるのか知らない親も多い。秋田県の子育て支援は充実していると思うが、その支援の情報にたどり着けない人がいるのも現状であり、そのような人たちにいかに情報を届けていくか、アウトリーチ型の情報発信の方法を掘り下げて分析する必要がある。
- ・ 県では様々な取組みを行っているが、人口減少問題など、数字に繋がらない原因として、課題と取組みのミスマッチがあるのではないかと。さらに掘り下げた分析を行い、ミスマッチが無いよう検討する必要がある。また、事業をやりっぱなしにせず、失敗も成功も次に活かせるよう、取組内容を丁寧に分析する必要がある。
- ・ 私たちの取組は次の世代のためにやっていることだと思うので、次世代になるべく借金を残さないよう、あまり予算をかけないでできる事はないだろうか。県の取組では、サポーターやコーディネーターなどの人材が多数いるようだが、これらの方々の分野を超えたネットワークの構築について、はじめは情報交換などつながる事からはじめ、将来には、施策の隙間を埋められるようになって欲しいと思う。
- ・ 若者の県内定着を図る点では、親の姿勢が大きい。秋田に帰ってきたって仕事がない、などと親が言うってしまうのが問題。賃金だけではなく、どう働きたいか、どう生きたいかという事が大切であり、親の意識を変える事も重要だと思う。例えば「高校生県内就職率UP事業」での企業説明会などに、親の参加も可能にするなど、親世代にも企業情報を伝えていく事も必要ではないか。
- ・ 人口減少問題に関心がある県民は、少数かもしれないが、オール秋田を目指すのであれば、関心の無い方々にこそ、少しでも関心を持っていただき、その方々からもサポートしていただかなければならない。どうすればそうなるのか、検討していただきたい。

●藤原部会長

- ・ 昨年この部会ではP D C Aについての議論が多かったし、とても大事な視点だと思う。
- ・ 地元に戻りたいと思っている若者はたくさんいると思う。そういう人たちにぜひ帰ってきてくれ、ということ声を大にして伝えていくことと、都会でスキルを身につけた人たちにどうやって地元で活躍してもらおうか、ということを考えていきたい。
- ・ 移住したい県No.1である長野県は、全部の市町村が特色ある移住施策を持っている。移住を希望する人のニーズに合わせて市町村を紹介できるようになっているのに対して、秋田県は似たり寄ったりに思える。長野県の真似や参考でいいので、各市町村から提案してもらえないか。
- ・ シンクタンクまでは行かないが、起業者や農林業、働いている若い人たち、それに行政の若い人が集まってどこか事務所を設けて、自由に話し合っ秋田をどうしていくかというインパクトのある提言をしてもらいたい。優秀な人たちもたくさんいるのだから、

次世代の人たちが秋田の将来を考えていくことが必要だと思う。

●藤原部会長

- ・ 地域づくりについて、あまり意見が出ていないようだが、何かないか。

●須田委員

- ・ 地域づくりとはどういうものか、ということを町内会や住民レベルまで理解されていない。考える過程を見せていかないといけない。
- ・ 現在秋田市の東部地区で、地域づくりに関わっているが、地域の特徴は何かということを見せていく、ファシリテーション業務ができる人を各地に育てていくことができればいいと思う。
- ・ 県境では隣県と連携して地域づくりや移住の取組をすると面白いのではないか。

●藤原部会長

- ・ ファシリテーターはやはり若い方がいいのか。

●須田委員

- ・ 横文字を使うことも多いし、若い人が多いように思うが、実際には若い人も高齢者も両方見られるような、中間の年齢の人がよいように思う。

●山崎委員

- ・ 現在子ども広場では保育士の資格をもっている人は9人いる。保育士の資格を持っていて保育の現場で働いていない潜在保育士は多くいると実感している。保育士が短時間勤務という働き方ができる環境の整備を、検討する必要があるのではないか。この事は秋田県だけに限った問題ではないので、知事が言う秋田モデルを、全国に向けて発信できる内容になるのではないか。

●藤原（は）委員

- ・ 女性が保育士として長時間働く上では、夫の理解が必要。そうでなければ両親の助けなど、何らかの助力がないと難しいのだと思う。

□猿橋あきた未来創造部次長

- ・ 企業等にとって人材確保が大きな課題となっており、国では外国人労働者活用の話も出てきている。働き方改革について議論するにはちょうどいい時期かもしれない。

●藤原部会長

- ・ 事務局から何かあるか。

□事務局

- ・ 次回は、7月中旬以降で日程調整する。今日の意見をまとめて議論できるよう整理する。
- ・ 意見や必要な資料については、メール等により事務局に連絡いただきたい。
- ・ 委員のメールアドレスについては、皆様の了解を得て委員全員で共有する。

●藤原部会長

- ・ 長い時間ありがとうございました。次回も有意義な議論をお願いします。

以上